

自治体維新

首長インタビュー



佐賀県鳥栖市長

橋本 康志 氏

はしもと やすし 1956年佐賀県鳥栖市生まれ。79年早稲田大学商学部卒。富士通入社。86年4月、弁当販売会社の中央軒（鳥栖市）入社。同年5月から社長。佐賀経済同友会常任幹事、九州経済同友会企画委員会委員などを歴任。経済・文化関係者などで行く街づくり団体「鳥栖コンベンション・シティー委員会」理事として市政に提言。2007年3月、現職候補を破り鳥栖市長に初当選。現在2期目。

サガン鳥栖J1昇格、アウェー客を誘致

九州を縦横に走る3本の高速道路が交差する佐賀県鳥栖市。近年多くの物流施設が進出している産業都市だ。人口約7万人のこの小都市を本拠地とする「サガン鳥栖」が2012年からサッカーJリーグ1部（J1）に昇格した。これを機に、橋本康志市長は、対戦クラブの応援に駆けつけるアウェーサポーター（観客）の集客に乗り出した。さらに音楽祭やコンベンションも誘致。市外からの集客に力を入れる。

試合日は市役所にアウェーのクラブ旗

サガン鳥栖のJ1昇格による佐賀県内経済波及効果は、佐賀県の推定によると2011年の約1.4倍の約27億5000万円。宿泊費や飲食費など入場料以外にアウェーサポーターが街で使う総額は1試合平均718万円だ。地元鳥栖市では12年度予算に練習場の整備などで5億円を計上し、手厚いサガン鳥栖支援策を打ち出した。

鳥栖市は現在のクラブ運営会社が設立された08年に佐賀県とともに300万円ずつ出資した。佐賀県と県内市町で設立していた支援団体「佐賀県プロサッカー振興協議会」に専従職員1人を派遣し、協力してサッカー教室や小中学生の無料招待など

地元客の集客事業を展開してきた。

そして12年から始めたのが対戦クラブ、すなわちアウェーのサポーターの集客策だ。12年度に発足した佐賀県くらし環境本部文化・スポーツ課や鳥栖市観光協会と連携し、スタジアムのアウェー側入場口に鳥栖市などの観光情報や特産品を紹介するブースを設けた。さらに他のクラブが主催するアウェーでの試合にも職員を派遣し、鳥栖市で開催する試合の告知活動も始めた。サッカーの試合ができるのは対戦相手があるからこそ。試合開催日には市役所やスタジアムに対戦相手のクラブ旗を掲揚して敬意を示している。

もてなしの動きは民間にも広がっている。例えば中心商店街の飲食店有志が試合のチケットを持参した客の料金を割り引く「アウェイ割」、サガ



サガン鳥栖の主催試合でアウェーサポーターに観光情報や特産品を配布（5月12日）

ン鳥栖が勝利した日にはさらに割り引く「やけ酒割」を始めた。市ではスタジアムで対象店舗を紹介したチラシを配布して集客の手助けをしている。サポーターの間で口コミが広がり、店に事前予約を入れる客も増えてきたようだ。

J1昇格で試合開催日がこれまでの日曜日中心から土曜日中心に変わり、市内への宿泊者増も見込める。現状はスタジアムの目の前のJR鳥栖駅から特急や快速を利用すれば、20～30分で博多駅に着いてしまうため福岡市などに宿泊するアウェー客が多いが、今後は試合前や終了後のイベントなどを実施して、1日中楽しめるようにして鳥栖市独自の魅力を磨いていきたい。

もちろんJ1リーグ戦は同じクラブとの対戦は年2試合だけで、鳥栖市での試合はそのうち1試合だけだ。前半戦を終えたところでサガン鳥栖はチーム一丸となった組織力で粘り強い試合運びを見せ善戦し、心配せずに試合を見ていられる。市としてもこうした活動を継続することが大事だ。

国際音楽祭に5万4000人、市民の誇りに

1995年、フランスの小都市ナント市で始まったクラシック音楽の祭典「ラ・フォル・ジュルネ」。「一流の演奏を低料金で」というコンセプトや、同祭典によって造船不況にあえいでいたナント市が人口増に転じたことで注目され、

日本では05年に東京都が誘致。鳥栖市は11年のゴールデンウィークに国内5番目の開催をした。またコンベンション誘致にも力を入れる。

ラ・フォル・ジュルネ誘致のきっかけは05年、私が弁当販売会社「中央軒」の社長を務めていたころに遡る。当時、九州経済同友会で「道州制」制度の委員を務めており、ナント市を視察する機会があった。同市に着目したのは鳥栖市と同じ小都市だったためだ。10年、再度渡仏して芸術監督のルネ・マルタン氏との誘致交渉に臨んだ。しかし「東京などで開催している」「鳥栖市には文化的な素地がない」と否定的だった。それでも熱意をもって説得して誘致にこぎ着けた。



昨年に引き続き「ラ・フォル・ジュルネ鳥栖」を開催。5万4000人が来場した。

第2回となった12年の開催に関しては鳥栖市の負担金などを巡って市議会から反対の意見が出た。だが市民が誇れる音楽祭に育てて、鳥栖市の知名度を上げることなどの意義を訴えると同時に、広告費の削減などで市の支出を11年に比べて半減し1000万円にした。他都市との共同開催だから演奏家の渡航費用を分担できたのも大きかった。

プレ公演を含めて11年は7万人、会期が1日少なかった12年は5万4000人が来場。4割が鳥栖市以外からの来場者だ。「東京会場よりゆっくり鑑賞できる」と評価する遠方からの来場者の声も聞いた。国内他会場と比べると若い人、特に小さな子供連れの客が多いのが特長になっている。12年は楽器に触れる体験型のプログラムや飲食屋台を増設。家族連れで楽しめる要素を拡充した。

マルタン氏らもこの特性を高評価。「来年は数

百円で聴ける公演（12年の有料公演は大人1000～2000円）を設けたい」と話している。演奏中に泣き出す子供もいるが織り込み済みだ。子供たちが初めて本物のクラシック音楽を聴く場を提供して、音楽会のルールを鳥栖市で身につけてもらえるのは素晴らしいことだと思う。

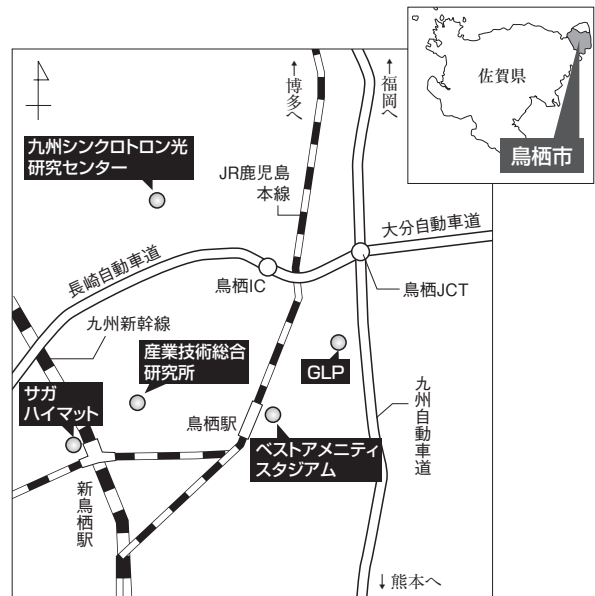
鳥栖市には産学官で連携して新技術の確立を目指す「産業技術総合研究所九州センター」、光産業開発を目指す「佐賀県立九州シンクロトン光研究センター」がある。九州新幹線・新鳥栖駅も11年3月に開業した。コンベンションを誘致するのは、こうした施設と学会を開く団体や企業とを結びつけるためだ。鳥栖市や近隣自治体で学会やスポーツ大会を開催し、参加者が鳥栖市内に宿泊する団体に補助金を出す制度を11年度に設け、11年度は「日本放射光学会」など6団体延べ1177人が宿泊した。12年度予算にも11年度と同額の100万円を計上している。

産業誘致、物流のほか医療産業にも軸足

高速道へのアクセスが評価され、鳥栖市には多数の物流企業が進出した。特に「グリーン・ロジスティクス・パーク鳥栖（略称GLP）」（分譲面積46.1ha、全42区画）の存在は大きい。橋本市長が就任した翌07年度以降を見ると、物流施設の進出は33件のうち31件がGLPへの進出。だが製造業の進出件数は8件と鈍い。

GLPへの進出は順調に進み、残る区画は2区画になった。さらに物流施設を誘致するかどうかは佐賀県と相談の上、考えていきたい。ただし特定業種に偏らない産業構造が理想だ。物流施設と比べると1ヶタ多い雇用が見込める製造業も引き続き誘致していく。企業には産総研など市内の2つの研究施設をアピールして新しい地場産業の育成につなげたい。

さらに来春には九州新幹線・新鳥栖駅前に国内4番目となる最先端のがん治療施設「九州国際重粒子線がん治療センター（愛称・サガハイマツ



ト）」が開業する予定だ。鳥栖市では土地を無償貸与し5年間の固定資産税免除を決定しており、4月の臨時議会で固定資産税などの課税を20年間免除する条例案を可決し支援している。

九州は半導体産業が集まり、日本の「シリコンアイランド」と言われてきた。円高など企業を巡る情勢は変わっているが、次の柱として「メディカルアイランド」という考えもあるのではないかと。市としてはサガハイマツを核にして医療産業の集積を目指していきたい。

センターでは九州の医学部を持つ12大学とそれぞれの得意科目を生かしたネットワークづくりを模索している。佐賀県や九州には有名な温泉地が多数ある。最先端の治療と保養を結びつけた九州各都市とのネットワーク化を後押ししたい。 **G**

インタビューから▶▶

口癖は「九州の鳥栖市」。九州各都市に「いかに鳥栖を利用してもらうか」を常に考えているという。1期目の仕事としては佐賀、福岡県境を越えた3市1町の公立図書館の広域利用制度開始が印象深いという。九州経済同友会で道州制の検討委員を務めた橋本市長らしい。一方、帰郷するまで鳥栖市には「金太郎アメのような特長のない街」という印象しかなかったと語る。サガン鳥栖などの顔を得、「情報発信力を鳥栖市の元気に」と話すかじ取りに注目が集まる。
(佐賀支局長 檀上 泰弘)